資料４

長野市文化財保存活用地域計画
（素案）

最終更新：令和５年１月 12 日

目　次（案）

序　章　はじめに
　１　計画作成の背景と目的
　２　計画の位置づけ（関連計画）
　３　計画期間
　４　計画作成の体制
　５　計画の対象及び用語の定義

第１章　長野市の概要
　１　自然的・地理的環境
　２　社会的状況
　３　歴史的背景

第２章　長野市の文化財
　１　文化財に関するこれまでの調査
　２　地域計画の作成に伴う調査
　３　長野市の文化財の概要

第３章　長野市の歴史文化の特徴
　１　歴史文化の特徴の整理の経緯
　２　長野市の歴史文化の特徴

第４章　文化財の保存と活用の方針
　１　文化財の保存と活用に関わる課題
　２　文化財の保存と活用に向けた基本方針
　３　文化財の保存と活用に関わる措置

第５章　関連文化財群
　１　関連文化財群の考え方
　２　長野市の関連文化財群
　３　長野市の維持向上すべき歴史的風致

第６章　文化財の保存活用に向けた推進体制
　１　進捗管理と評価の方法
　２　推進体制
　３　関係法令の活用

別　章　指定等文化財の一覧

序章　はじめに

1　計画作成の背景と目的

長野市は、山梨・埼玉・長野にまたがる甲武信ヶ岳から発し日本海へと注ぐ日本一長い千曲川と、北アルプス槍ヶ岳を源とする犀川が合流する長野盆地に位置する。二大河川によって肥沃な土壌が運ばれる平地と、それを取り囲む山々からなる本市は、多様な自然環境に応じた暮らしの中で、多様な文化をはぐくんできた。その中でも、「遠くとも一度は参れ善光寺」と言われ、全国から参詣者を集める善光寺とその門前町や、近年パワースポットとしても注目を集めた山岳信仰の地、戸隠山と戸隠神社、戦国大名上杉謙信と武田信玄が戦いを繰り広げた川中島古戦場、川中島の戦いで武田方の拠点として築かれた海津城から始まり、江戸時代真田十万石の城下町として栄えた松代などは、地域の文化財を活かした魅力ある地域づくりによって、国内外から多くの観光客を迎え、その数は年間約1千万人にものぼる。

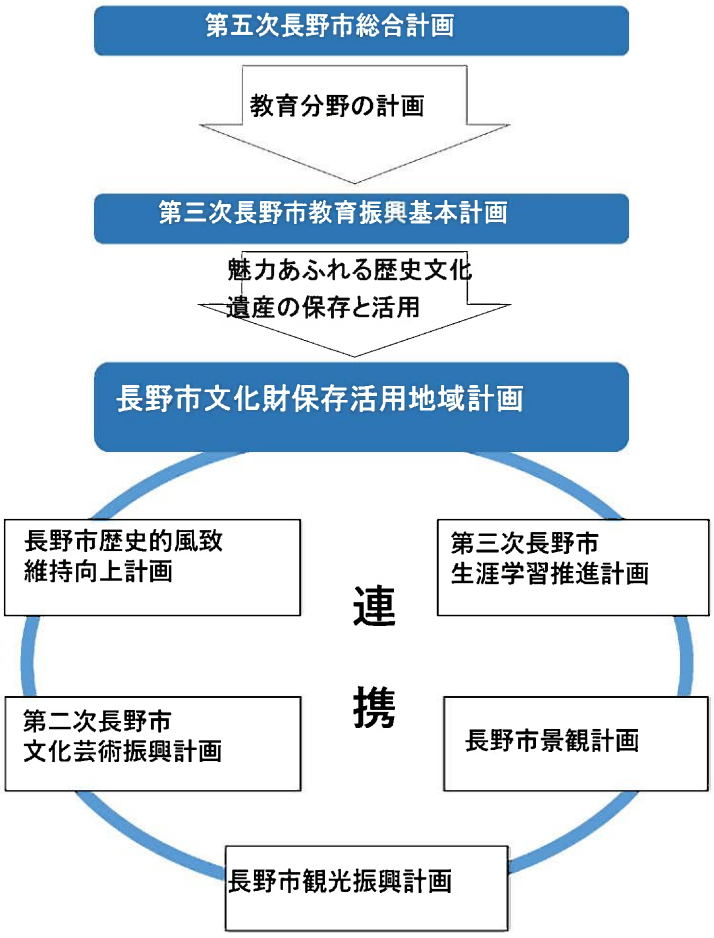
しかしながら、少子高齢化や社会構造の変化による地域コミュニティの弱体化、近年の地震や水害、新型コロナウィルスの感染拡大といった災害など、文化財を取り巻く社会状況は厳しいものとなっている。市指定の無形民俗文化財の中には、地域コミュニティの弱体化によって祭りの維持が困難となり、指定解除となったものさえある。さらに、未指定の文化財については、その価値が認識されないまま失われることも多くあると懸念される。また、地震や水害などの自然災害は、人命や文化財といった物質的な喪失だけでなく、地域のアイデンティティや誇りの喪失にもつながっていく。令和元年東日本台風による千曲川沿川の水害は記憶に新しい。

このように、文化財を取り巻く状況は厳しいが、その中にあって地域の文化財を掘り起こし、地域の魅力作りに繋げようと活動している団体が市内各地に存在している。本計画は、このような団体とも連携して地域の文化財を積極的に発掘し、その魅力を多くの市民と共有し、文化財を保存活用しながら後代へ継承するための取り組みを進めるとともに、地域活性化や地域課題の解決などにも活かすために作成するものである。

２　計画の位置づけ（関連計画）

本計画は、文化財保護法第 183 条の３に基づき「市町村の区域における文化財の保存及び活用に関する総合的な計画」として作成したものである。また、本市の「第五次長野市総合計画」の教育分野の計画である「第三次長野市教育振興基本計画」の個別分野の計画に位置づき、文化芸術、生涯学習、まちづくり、景観、観光など、本市の諸計画と連携を図るものである。

また、「長野市歴史的風致維持向上計画」とは、文化財保護法第 183 条の３第４項に基づき調和を保つものである。



3　計画期間

計画期間は令和６年度（2024）から令和 13 年度（2031）までの８年計画とする。

4　計画作成の体制

本計画の作成にあたっては、長野市文化財保存活用地域計画協議会で作成の調査、審議を行い、長野市地方文化財保護審議会から意見を聴取した。またパブリックコメント等による市民からの意見を踏まえた。

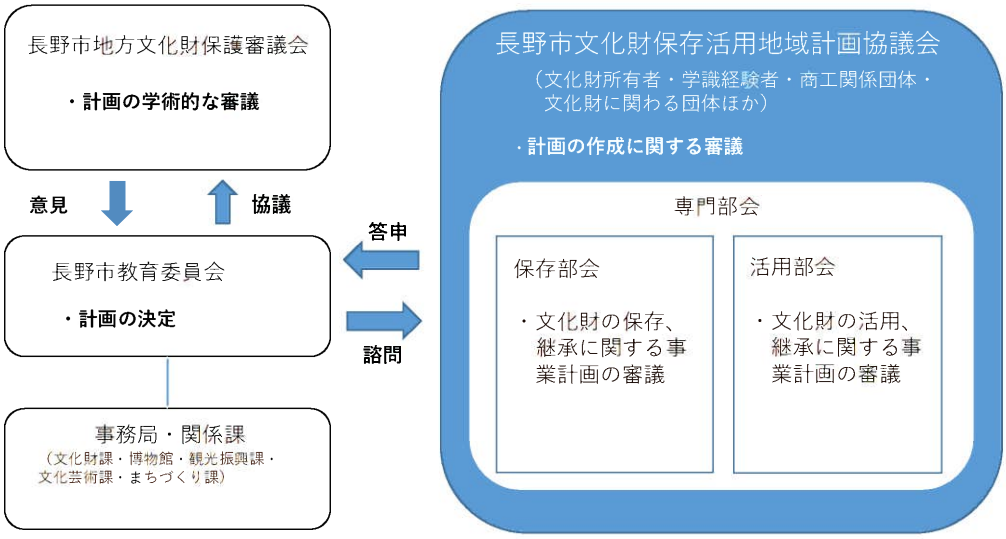


図　計画作成の体制

５　計画の対象及び用語の定義

本計画では、市内に所在する次世代に継承すべき全ての文化財とその周辺環境を対象とする。本計画で用いる用語のうち、「文化財」と「文化財の周辺環境」については、以下のように定義した上で使用する。

文化財

本計画でいう「文化財」とは、文化財保護法第２条に規定されるもので、有形文化財（建造物、絵画、彫刻、工芸品、書籍、典籍、古文書、並びに考古資料及びその他の学術上価値の高い歴史資料）・無形文化財（演劇、音楽、工芸技術等）・民俗文化財（衣食住、生業、信仰、年中行事等に関する風俗習慣、民俗芸能、民俗技術及びこれらに用いられる衣服、家屋、その他の物件）・記念物（貝塚・古墳、都城跡、城跡、旧宅、庭園、橋梁、渓谷、海浜、山岳その他の名勝地並びに動物、植物、地質鉱物）・文化的景観・伝統的建造物群を指す。また、文化財保護法で保護の対象とされている埋蔵文化財・保存技術も「文化財」に含めている。

「文化財」の中には、国、県、市が指定、選択、選定、登録することにより行政による保護措置が講じられている指定等文化財と、地域の特徴をあらわしているものであっても行政による保護措置が講じられてこなかった未指定文化財があるが、本計画での「文化財」は、指定・未指定全てを包括したものである。

文化財の周辺環境

本計画でいう「文化財の周辺環境」とは、対象の文化財が置かれている自然環境や周囲の景観、文化財を支える人々の活動に加え、文化財を維持・継承するための技術、文化財に関する歴史資料や伝承等、対象となる文化財を取り巻き、相互に影響を与える事柄を指す。

第１章　長野市の概要

１　自然的・地理的環境

(1)位置

長野市は、日本のほぼ中央にある長野県の北部に位置する。東西 36.5km、南北 41.7km、面積は約 834.85 ㎢。標高の最高地点は、新潟県境に位置する高妻山の 2352.8m、最低地点は市の北東部に位置する千曲川下流端の 327.4mで、標高差は 2025.4mである。

長野市は、北西部の山地と南東部の長野盆地側で大きく地形が異なっている。北西部は標高 2000mを超える急峻な戸隠連峰、標高 1200m以下の地すべりの多い比較的なだらかな山地があり、その山地を裾花川や土尻川が東へ流れ、犀川に合流する。犀川は、市の西側からほぼ東に向かって山地の中を蛇行しながら流れ、やがて千曲川に合流する。千曲川は市内を南西から北東方向に流れる。3 つの川の合流点の周辺一帯は善光寺平と呼ばれる盆地であり、河川の氾濫でできた平地が広がる。

(2)地勢

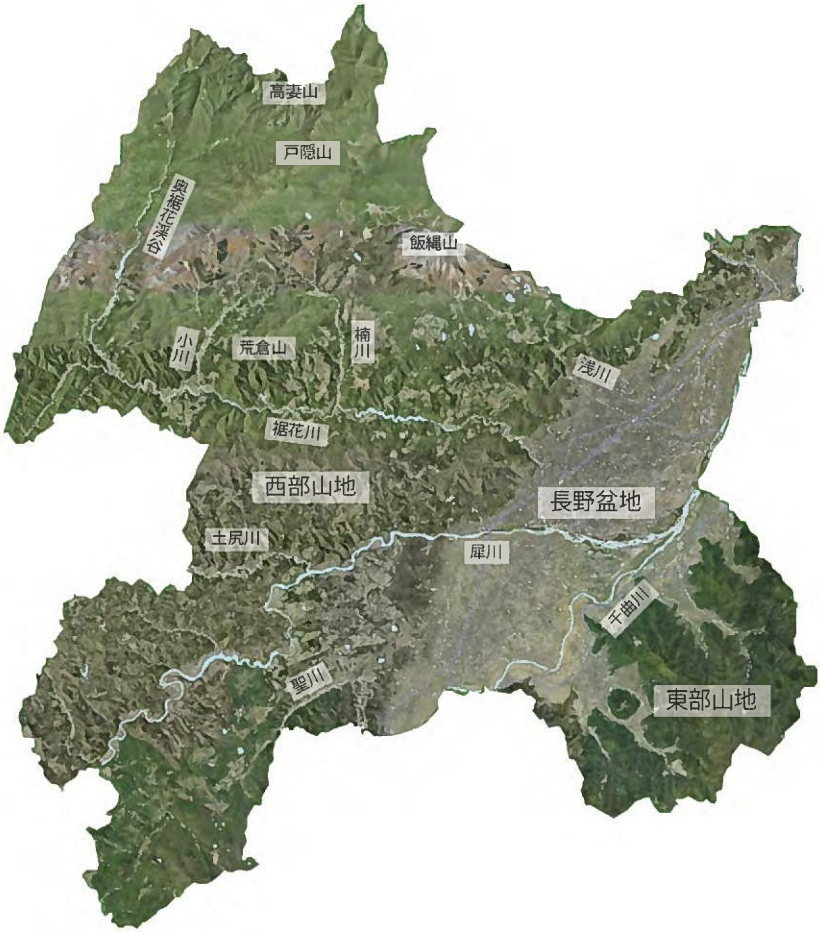
長野市は、地形的に中央の長野盆地とその東西にある西部山地と東部山地に大別される。

この一帯は北部フォッサマグナ地域に含まれ、その海だった場所に堆積した新第三紀層がこれらの山地を構成している。西部山地の北には第四紀火山である飯縄火山が位置し、その山体や山麓は火山噴出物で構成される。長野盆地の周辺にある皆神山や髻山なども第四紀に噴火した小規模火山である。中央部にある長野盆地は、第四紀の中ごろから長野盆地西縁断層の活動が活発化して落ち込んだ部分で、そこに千曲川や犀川・裾花川等が運んだ河川性ないしは湖沼性の堆積物が堆積している。西部山地は、約 1000 万年から 200 万年前にかけて、海底に堆積した泥・砂・礫などの地層や海底火山の噴出物である溶岩や凝灰角礫岩類が分布する。西部山地は、現在も隆起を続ける地域で、硬い地層である溶岩や凝灰角礫岩類でできた戸隠連峰や虫倉山系、富士の塔山から三登山にかけての部分は、険しい山地をつくる。これらの海成層からは、日本の石油産業の発祥の地ともなった浅川産の石油や、市内各地から海生の貝類をはじめ各種の化石を産出する。また、雪の多い戸隠連峰から流下する裾花川は水量も多く、この地域が隆起を続けていることもあって浸食が進み、地層が連続して露出している。地層の積み重なりや化石の産出状況、各種の堆積構造、風化・浸食でできた構造や地形を学ぶことができる。

東部山地は、西部山地より古い約 2000 万年から 1000 万年前の地層から構成されている。海底火山の噴出物や深い海に堆積した泥岩層などからなる。その後、約

1000 万年前から、地下からマグマが入り込んできて、硬い岩石（石英閃緑岩類）ができた。それらは、現在の温泉の熱源ともなっている。東部山地の硬い地層や岩石は、大室古墳群や松代城の石垣に使われ、松代大本営の立地条件ともなっている。この山地の北部には、四阿山から志賀高原にかけての第四紀火山が噴出した。

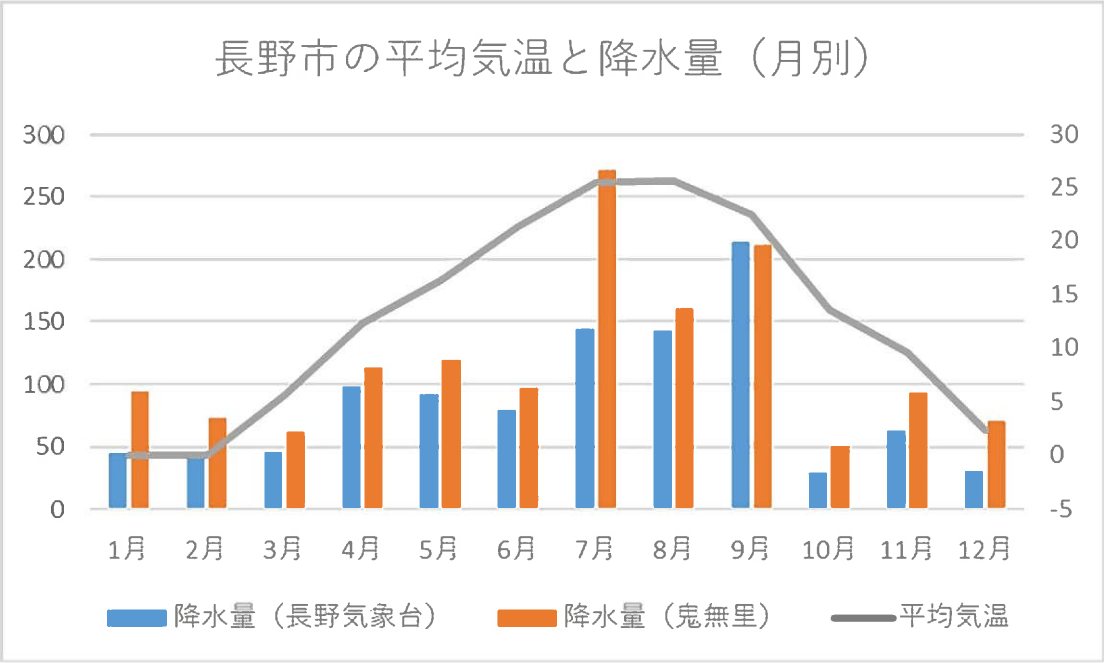
長野盆地の西縁部に活断層帯があり、西部山地の隆起と長野盆地の沈降をもたらしている。長野盆地西縁部の丘陵には、断層の動きで長野盆地が湖となったことを示す豊野層も分布する。この活断層は善光寺地震の震源ともなった。この断層の動きで、犀川や裾花川などが扇状地をつくった。この扇状地の扇央部に善光寺は立地し、その南側には門前町が栄え、中心市街地となってきた。長野盆地の沈降は今も続いており、河川が流れ込み氾濫原を形成している。この河川の運んだ土砂の自然堤防の部分が「島」と呼ばれる微高地になっており、集落が形成されてきた。



(3)気候

本市は周囲を山地に囲まれる盆地地形であると同時に西部山地を構成する戸隠連峰や飯縄山などが日本海から北西の季節風を遮る地形となっているため、内陸性気候の特徴が顕著にみられる。気温は年間の寒暖差が大きく、夏期の最高気温は 8 月の平均気温で 31°まで上がり、冬期の最低気温は 1 月で−4°以下まで下がる。日較差も年間を通して大きく、特に 4 月は 12°を越える寒暖の差がある。雨は夏季に多いものの、年間を通して降水量が少ないのが特徴で、2022 年を例にとると長野地方気象台での年間降水量は 1,023 ㎜で、日本の平均降水量(1,661 ㎜:1991 年から 2020 年の平年値)をかなり下回る。

一方で市の北西部、戸隠・鬼無里地区の新潟県境付近では積雪が多く、日本海側気候を示す。高妻山をはじめとする高山が連なり、夏季の 6 月から 9 月にかけても降水量が多く、鬼無里地区では年間降水量は 1,415 ㎜(2022 年)にも達する。



(4)自然

長野市は、市域が広大であるために、地域ごとに異なる自然がみられ、全体として高い多様性をもつ自然となっている。地形的には「山地」、「中山間地・扇状地」、「平地・河原」に分けられる。市内の自然の特徴は以下のようになる。

山地:飯縄山をはじめとし、西岳～戸隠山～高妻山～乙妻山に至る戸隠連峰、さらに堂津岳～中西山に至るまでの北安曇郡との境となる山々とそれらに囲まれた裾花川源流域。これらの山々には、飯縄山や高妻山への登山者のほかは、ほとんど人が入ら

ない。市内でもっとも標高が高く、積雪も多い地域で急峻な地形をなす。多雪地域に適応したトガクシソウなど「トガクシ」が種名につく植物がみられ、多くの新種が確認されてきた。しかし、急峻な地形のため十分な調査が行われてきたとは言えず、今後も新たな発見の可能性がある。手つかずの広大な自然が残る地域で、貴重な自然遺産と考えられ、妙高戸隠連山国立公園にも指定されている。

中山間地から扇状地：市域において最も広い面積を占め、長い年月にわたって人手が加わって成立してきた自然となっている。人間の活動が、適度な攪乱となって多様性の高い自然を形成してきた。コナラやカスミザクラなどを主とした落葉広葉樹林やアカマツ林など人手の加わった二次林が分布し、そこに水田や畑地、草地、集落などがモザイク状に入り組んでいる。さらに、地質・地形的な特徴や河川が分布境界となって、市内の各地域で動植物の違いがみられる。里山地域は、地すべり地で生じる湧水や緩斜面を利用し、棚田がつくられてきた。また、降水量が少ないこともあって各地でため池が築造されてきた。

盆地の平坦部：千曲川は、善光寺平に入ると河川勾配が緩やかとなり蛇行している。瀬・淵・ワンド・たまりなど多様な環境があり、そこに特有な動植物が生息・生育する。犀川は西山山地から善光寺平に入ると大きな扇状地を形成し、砂礫がつくる河原となっている。安茂里地区におけるコムラサキの集団ねぐらやコアジサシなどの礫河原に営巣する鳥類にとって、重要な生息地域となっている。

かつての千曲川が蛇行していた跡（河跡湖）の金井池、冬季にカモ類などが渡ってくる辰巳池などのため池、さらにホタルの生息する八幡川などの水辺環境があり、いずれも市街地のオアシスとして貴重な存在になっている。千曲川や犀川に代表される河川の周辺も独自の自然が残る地域である。

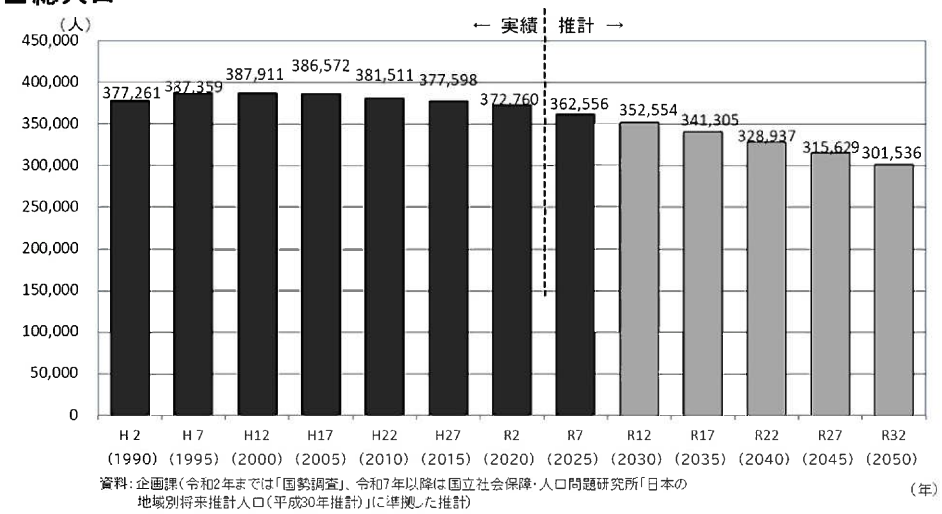
2　社会的状況

（１）人口動態

ア 人口・世帯数

長野市の人口のピークは、平成 12 年の 387,911 人で、それ以降は減少に転じている。今後も人口が徐々に減少していくとともに、旧合併市町村を含めた周辺地域の人口減少と、その受け皿となる長野市街地への人口流入が続いていくと予想される。また県外（特に東京）への人口移動が傾向として見られる。

■総人口

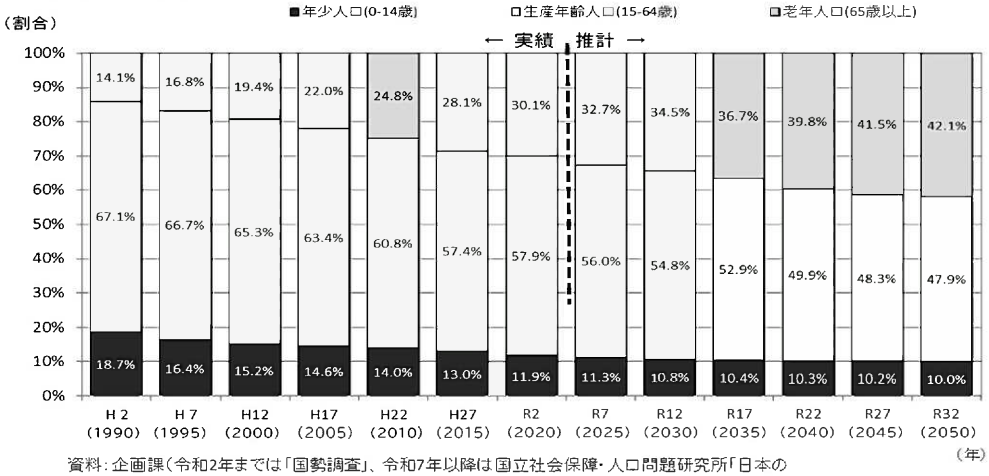


資料：企画課（令和2年までは「国勢調査」、令和7年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成30年推計）」に準拠した推計）

イ 年齢区分別人口

年齢構成をみると、年少人口、生産年齢人口の割合が減少する一方、老年人口は増加傾向にあり、少子高齢化が進行していることがわかる。平成 22 年の老年人口の割合は 24.8%であったが、令和 2 年には 29.8%となり、10 年間で 5%、人口比で 16,853 人増加している。

■年齢3区別人口



資料：企画課（令和2年までは「国勢調査」、令和7年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成30年推計）」に準拠した推計）
注：実際には、年齢不詳が含まれていないため、3区分の合計が必ずしも100%にならない。

ウ 地域別人口

地域別人口を見ると、長野地域（19 地区）の人口が最も多く、篠ノ井、更北、川中島、松代、若穂、豊野、信州新町、戸隠、信更、中条、七二会、鬼無里、大岡と続く。平成 27 年から令和２年にかけての増減率は、川中島地域まではほぼ増減が無いが、それ以降は減少に転じており、特に鬼無里地域は-15.2%と最も高くなっている。

エ 空き家の状況

本市の住宅総数は平成 25 年時点では 171,870 戸で空き家率は 14.5%となっている。県平均は 19.8%と全国で２番目に高いなかで、県平均以下であるが、全国平均は 13.5%と本市よりも低くなっている。

表 2-2　空家等実態調査の地区別棟数・世帯数に対する割合

平成29年3月末現在

地区名	空家等(棟) A	参考（世帯数） B	A / A+B		地区名	空家等(棟) A	参考（世帯数） B	A / A+B	
第一	170	2.786	6%		小田切	143	447	24%	
第二	259	5.330	5%		芋井	242	970	20%	
第三	173	3.547	5%		篠ノ井	617	16.600	4%	※
第四	68	1.345	5%		松代	605	6.974	8%	※
第五	78	2.413	3%		若穂	297	4.521	6%	※
芹田	276	12.721	2%		川中島	259	10.768	2%	
古牧	213	11.205	2%		更北	264	13.470	2%	
三輪	262	7.766	3%		七二会	200	751	21%	
吉田	180	7.168	2%		信更	262	926	22%	
古里	130	5.548	2%		豊野	133	3.691	3%	
柳原	47	2.788	2%		戸隠	388	1.507	20%	
浅川	209	2.828	7%	※	鬼無里	250	676	27%	
大豆島	85	4.941	2%		大岡	426	534	44%	
朝陽	137	6.174	2%		信州新町	550	1.937	22%	
若槻	265	8.202	3%		中条	414	868	32%	
長沼	65	910	7%		計	8.063	159.420	4.8%	
安茂里	396	9.108	4%						

※一部が中山間地域

中山間地域（13支所14地域）：浅川、小田切、芋井、信里、西条、豊栄、保科、七二会、信更、戸隠、鬼無里、大岡、信州新町、中条

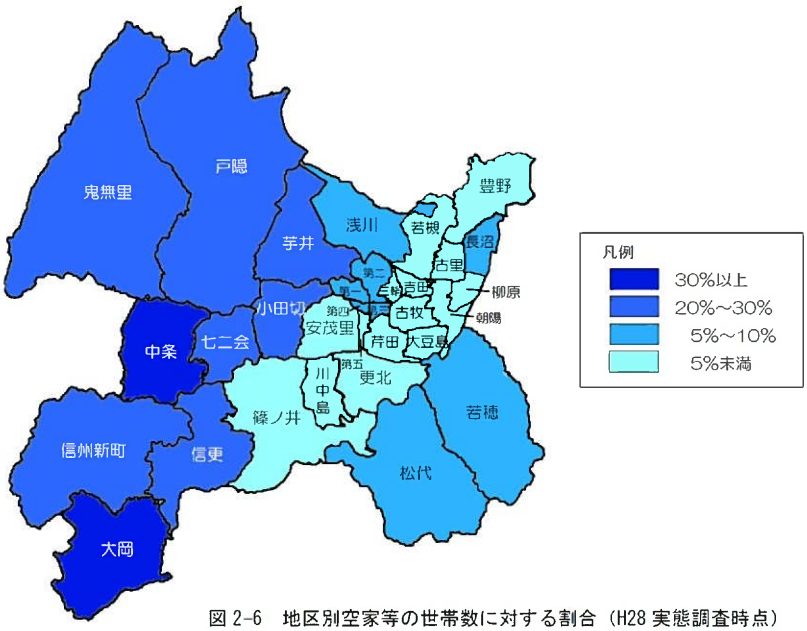
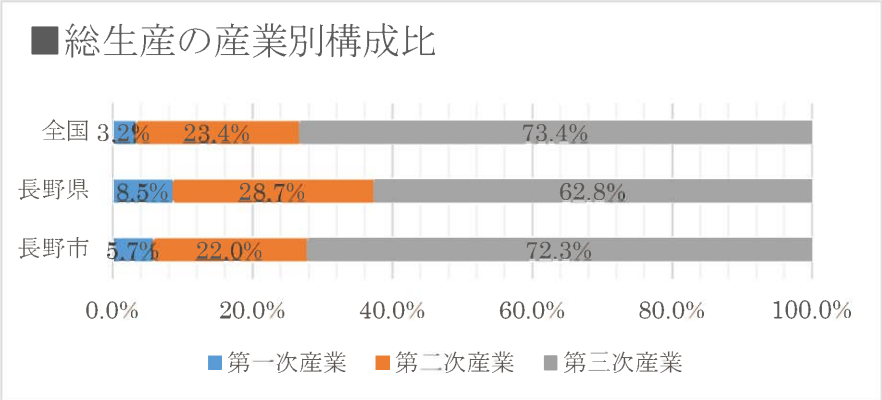


図 2-6　地区別空家等の世帯数に対する割合（H28 実態調査時点）

（２）産業

ア　産業別就業者数

本市の第二次産業としては、食料品、出版・印刷、電子デバイス・情報通信機器関連などを中心に発展を続けてきたが、国際的な競争力が求められるにつれ、第三次産業が約７割を占める状況へと変化している。

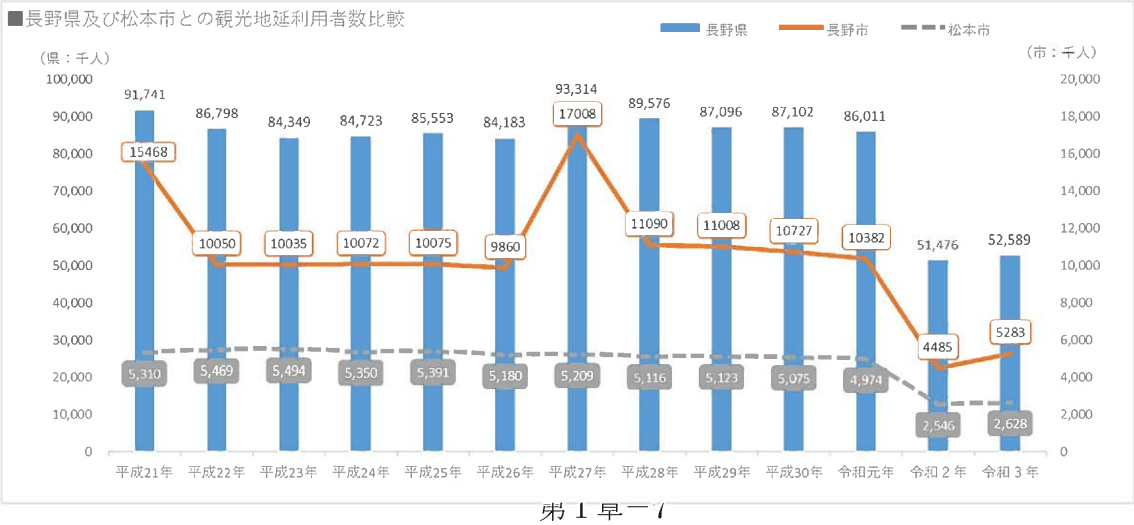


資料：令和２年度国勢調査

イ　観光

善光寺とその門前町は、古くから信仰の中心として全国の人々に親しまれ、周辺に広がる宿坊・仲見世などが観光の中心としてにぎわいをみせている。とりわけ、数え年で７年に一度開催される善光寺御開帳の年は、例年に比べて飛躍的に観光客が増加する。真田十万石の城下町である松代は、当時の面影を残した歴史的建造物が数多く点在している。これらの地域の観光資源を、住民自らが守り育てようと、「エコール・ド・まつしろ」などの取り組みが始まり、現在も、様々な団体がそれぞれの活動の中で、訪れる観光客をもてなしている。戸隠・鬼無里をはじめとした地域は、豊かな自然環境の中に、古くから伝わる様々な歴史・文化・芸能があり、秘められた観光資源が残されている。

令和２年からは、新型コロナウイルス感染症感染拡大状況により、海外からの渡航や国内の往来に制限が度々かかることがあり、長野県及び長野市の観光地延利用者数が落ち込んでいる。



出典：長野県「観光地利用者統計調査」

ウ 土地利用

人口減少の進行など社会情勢の変化による中心市街地の空洞化の進行、低・未利用地や空き家の増加などから都市的土地利用（住宅地、工業用地、店舗等）の需要が減少している。

農業の担い手不足による荒廃農地の増加、木材価格の低迷等に伴い適切施業がされない森林が増加していることなどから、農林業的土地利用の需要も減少している。

■土地利用の状況

①土地の利用区分別面積（令和３年４月現在）

土地の利用区分		面積（ha）	構成比（%）
農地		８，０１０	１０
	田	２，２６０	
	畑	５，７５０	
森林		５３，４６８	６４
原野等（原野・採草放牧地）		８５２	１
水面・河川・水路		２，９２２	３
道路		３，７４５	４
住宅		６，５０３	８
	住宅地	４，４６１	
	工業用地	１９２	
	その他の宅地	１，８５０	
その他		７，９８１	１０
市全体		８３，４８１	１００

②関係法令に基づく計画区域面積（令和３年４月現在）

関係法令の名称	計画区域の名称	計画区域面積（ha）	
都市計画法	都市計画区域	２１，５４１	市域の約 26%
農業振興地域の整備に関する法律	農業振興地域	４３，５３６	市域の約 52%
森林法	地域森林計画対象民有林	４１，４４５	市域の約 50%
自然公園法	国立公園区域	１０，２０４	市域の約 12%

エ 交通

長野市は明治４年依頼、長野県の県庁所在地として発展を遂げ、官庁、金融機関、事業所などの都市機能の集積に伴い、活発な人的交流と情報が集中する中核都市として発展してきた。

善光寺門前に位置する長野市の中心市街地を中心に、道路と鉄道が整備されている。道路は長野市から名古屋市へ伸びている国道 19 号と、群馬県高崎市と新潟県上越市を結ぶ国道 18 号が交わる交通の結節点となっている。市内南部松代地域には、東西に上信越自動車道が走っており、長野 IC と市街地は国道 18 号と主要県道によって接続されている。

鉄道は平成 9 年 10 月に JR 東京駅から JR 長野駅間において長野新幹線が開通し、首都圏から訪れる観光客の利便性が向上した。さらに平成 27 年に金沢駅まで延伸したことで北陸方面からの観光客の利便性が向上し、北陸新幹線に改められた。在来線としては。飯山市につながる JR 飯山線、松本市につながる JR 篠ノ井線、軽井沢町につながるしなの鉄道しなの鉄道線、上越市につながるしなの鉄道北しなの線があり、山ノ内町を結ぶ長野電鉄長野線がある。

長野市の交通

3　歴史的背景

（１）旧石器時代～弥生時代

ア　長野盆地の黎明

長野市域の東部山地・西部山地に 10 か所の後期旧石器の遺跡があり、飯綱高原の上ケ屋遺跡では多様な石器がみられ、地域交流の様子がうかがえる。

縄文時代、後氷期の気候変動で豊かな落葉広葉樹林の森ができ、食糧になる堅果類が豊富になった。シカ・イノシシなどの中・小型動物が繁殖し、千曲川とその支流は、回帰するシロザケ・サクラマスと淡水魚の宝庫であり、重要な食糧源となった。市域南部の若穂保科の宮崎遺跡からはシカの角製の銛やサメの椎骨を利用した耳飾りが出土する。この頃の平地は河川の流路が頻繁に変わる氾濫原であり常住が難しい場所であったが、千曲川河岸の地下４ｍからは縄文時代前期の集落が発見されており、縄文人が山地から長野盆地の中州や自然堤防、扇状地に進出したことが確認されている。

イ　赤い土器のクニ

平地での水田耕作は弥生時代中期後半に本格化し、千曲川の自然堤防上に集落を構え、後背湿地に水田を作る現在につながる原風景が成立した。稲作農耕は社会の仕組みそのものを大きく変え、ムラ同士の抗争も生まれた。市域東南部の松代にある松原遺跡には環濠集落が展開したが、環濠集落は弥生時代に覇権をめぐって市域内で抗争があったことを示している。

弥生後期の長野市域を特色づける土器は、出土地の箱清水に因み「箱清水式土器」と呼称されている。これは、壺・鉢・高坏型土器の表面をベンガラで赤く塗る「赤い土器」で、千曲川・犀川流域に広く分布し、地域色の強い「赤い土器のクニ」と呼ばれる文化圏を形成していた、と考えられている。

（２）古墳時代～平安時代

ア　巨大古墳と積石塚古墳

古墳時代の前期末頃には、近畿の大型前方後円墳と同じ造りの大型の前方後円墳が長野でも築造された。その代表的な例は、篠ノ井の川柳将軍塚古墳であり、この地域を治める「王」が代々存在し、大和政権とのつながりを示す緩やかな政治圏が広く形成されていたことを示唆している。

古墳時代中期後半になると、大型前方後円墳をつくった地域王権から独立した中小豪族の古墳が千曲川流域の各地に造られた。これらの特色は、血縁関係者に継承される古墳が継続的に複数造られ、古墳群を形成したことにある。千曲川右岸の松代地域では積石塚と合掌型石室の存在を特徴とする総数 500 基余の大室古墳群がある。

イ シナノから信濃国へ

大化の改新（645 年～650 年）以降の律令制のもと、天武・持統朝に全国を 60 余の「国」に分ける政策によってシナノは科野国として成立した。科野国はまた、律令制で定められた五畿七道のうち東山道に区分され、越の蝦夷に備えるための前線に位置していた。そのため科野国はヤマト王権にとって重要な地として、天武朝には科野への遷都計画がたてられ、持統朝では天候不順が長く続いた持統紀５年に「須波神」と「水内の神」に勅使を派遣させた記録が残されている。東山道は当時の行政区画のひとつであるとともに、畿内から陸奥国に至る東山道の諸国国府を結ぶ政治的、軍事的な道の呼称でもあった。市域には北陸道へとつながる東山道の支道が確認されるが、これも対蝦夷対策の道とも指摘されている。

その後和銅６年（713）に出された諸国の国名を縁起の良い二文字に改めさせる令により、国名が「信濃」へと変更された。国の下には郡が置かれ、信濃には 10 の郡が置かれた。そのうち北信濃には水内郡、埴科郡、更級郡、高井郡の４郡が置かれた。律令制以前国造としてシナノ国を治めていたシナノ国造は、律令制下では金刺舎人や他田舎人と名乗り、郡司層として在地支配を担った。

ウ 中世への胎動

８～９世紀には天候不順や自然災害が多く記録されるようになる。近年の発掘調査でもその痕跡が確認されている。この時期は相続く災害により古代の水田が荒廃し、人々も逃散するなど律令制下の既存の権力が揺らぐ一方で、その混乱の中で富を蓄積させた有力者が現れた時期である。

この頃長野盆地で進められた条里水田の再開発などは、台頭してきた富裕者層や郡司を国衙が組織して進めた事業であったと考えられる。篠ノ井東福寺・川中島御厨の南宮遺跡は当時勢力を持ちつつあった有力者を中心とする集落であった。

10 世紀頃になると全国的に摂関家藤原氏への寄進地系荘園が増加する。市域でも、千田荘、英多荘、芋河荘、太田荘などが成立した。

エ 古代の長野盆地の社寺

現在、若穂保科の清水寺、稲葉の観音寺、安茂里の正覚院、稲葉の地蔵院、千曲市の観龍寺、智識寺などには平安時代の観音像が残されている。これらは当時市域に存在していた荘園とのつながりによるものと想定され、長野盆地でも全国的な観音信仰の広がりとともに霊場が形成されたことがうかがえる。10 世紀後半以降は末法思想の影響で豊野町の鷲寺や篠ノ井の長谷寺などで経塚が作られるようになるなど、北信濃一帯における観音信仰や末法思想の広がりから、善光寺信仰や戸隠信仰が生まれたことがうかがわれよう。

長野市の代表的な社寺である善光寺と戸隠神社(奥社･中社･宝光社･九頭龍社･火

之御子社）の名が文献に現れるようになるのは平安時代に入ってからである。善光寺は10 世紀に成立した『僧妙達蘇生注記』が初出とされる。戸隠山は平安初期には戸隠が山岳密教の霊山として注目されていたが、文献では 11 世紀初め、歌人の能因法師がまとめた『能因歌枕』の中に信濃の歌枕の一つとして「とがくし」があげられており、この頃よりその存在が中央にも認め知られるようになってきたことがわかる。

オ 横田河原の戦い

平安時代末頃には荘園の荘官のなかで武力によって勢力を伸ばす者が現れ互いの勢力の伸長を巡って戦さが繰り広げられるようになって行く。そうした時代にあって、武力で藤原氏に代ったのが平氏であった。信濃国も平家方の武士が有力であったが、治承4年（1180）9月、平家追討のために、木曽義仲が挙兵し、京を目指して北上した。木曽義仲は挙兵後、すぐに市原合戦（善光寺合戦）で平家方の笠原頼直を討ち、翌年の養和元年（1181）6月には、越後の城資職助茂（長茂）を篠ノ井横田の地で破った。（横田河原の戦い）。

（３）鎌倉時代～戦国時代

ア 善光寺門前町の成立と発展

善光寺は治承３年（1179）に焼失したが、源平合戦に勝利した源頼朝の命によって 10 年後の建久２年（1191）に再建された。鎌倉幕府の主導による善光寺再建は、全国で有力御家人を檀那とした新善光寺の建立や善光寺仏の模造の流行を呼び、鎌倉時代後期になると善光寺信仰は全国各地へ広がった。それに伴って善光寺への参詣路も整備された。鎌倉時代後半に成立し浄土宗の教えを弘めた『一遍聖絵』は、三国伝来の如来信仰の聖地として当時の善光寺や門前の賑わいを余すところなく伝えている。この時代に善光寺に参詣したことが記録からわかる人物には源頼朝をはじめとして一遍、久我雅忠の娘二条、他阿真教などがおり、伝承としては親鸞の名も伝えられている。

イ 戦乱の時代

鎌倉幕府が滅亡すると、北条高時の遺児で中先代と呼ばれた北条時行が諏訪氏を頼って挙兵し、八幡河原、篠井河原、四宮河原で信濃守護小笠原貞宗方と戦った。

室町時代になると濃国守護に任じられた小笠原長秀に在地の国人領主らが反発し、応永７年（1400）には、信濃国に入国した小笠原長秀に対し、東北信地方の国人領主たちが一揆を結び反抗し、篠ノ井塩崎・二ツ柳周辺を戦場に長秀軍を敗退させる大塔合戦が起こっている。

戦国時代になると北信濃は領地争奪の場となる。特に武田と上杉による川中島の合戦は北信濃一帯を戦場に、複数回にわたって戦いが繰り広げられたとされる。この合戦により善光寺の本尊や仏具そして衆徒までもが、武田・上杉両

軍によって持ち去られ、門前町が衰退するなどこの地に大きな影響を与えた。善光寺如来は弘治元年（1555）に武田方によって善光寺から移され、以来慶長３年（1598）に豊臣秀吉の命によって京都方広寺から善光寺に戻されるまでの約40数年間、そのときどきの権力者の意向によって各地への流転を余儀なくされた。

なお、川中島の合戦の際、武田方の拠点として松代に造られた海津城は、江戸時代に入ると川中島四郡（高井郡・水内郡・更級郡・埴科郡）を治める信濃国最大の領国の中核として発展していく。

（４）江戸時代

ア 交通運輸

江戸時代になると主要五街道に次ぐ脇街道として北国街道が整備された。北国街道は追分宿（軽井沢町）で中山道から分岐し、矢代宿（千曲市）を過ぎて二つに分かれる。一つは、丹波島宿～善光寺宿～牟礼宿（飯綱町）に至るルート。もう一つは、松代城下町を通り、福島宿（須坂市）～長沼宿～牟礼宿に向かうルートであった。長沼城と松代城を結ぶ後者は戦国時代から江戸時代初期における主要ルートであったが、次第に善光寺町を通るルートが主となっていき、松代道は犀川の洪水による舟留めの際の迂回路として利用されるようになった。北国街道の発展はそれに接続する大笹街道や三原道、峰街道といった脇往還の発展も促した。また江戸時代後半には千曲川や犀川で舟運が開通し、陸上交通とともに江戸時代の物流の一翼を担った。

一方、江戸時代「山中」と呼ばれた長野盆地西部中山間地域での交通の要衝だったのが鬼無里である。鬼無里は松代、戸隠、高府、安曇野に通ずる道の分岐点であったため、早くから六斎市として市の開設が許可され、その後には九斎市となった。これらの市は今の鬼無里町地区に立ち、ここで主に麻、楮、和紙が取り扱われた。鬼無里にある土倉文珠堂は白馬からの山越えの道沿いに建ち、内陣には幕末から明治にかけてこの道を行き交った人たちの落書きが記されており、往時の賑わいの一端をうかがうことができる。

イ 真田十万石の城下町松代

江戸時代、長野市域の大半は松代藩領で占められ、そこに善光寺や戸隠山といった寺社領、飯山藩領、須坂藩領、上田藩領、塩崎知行所などが所在した。

信濃国の中で最も規模が大きかった松代藩の政庁である松代城は、川中島の戦いの際、武田信玄が築いた海津城がそのはじまりとされる。その後、領主の移り変わりと共に、城将・城代などが入れ替わり、それに伴い城下町も整備され、松代城は北信濃支配の拠点として重要な役割を担うようになっていった。

元和8年(1622)真田信之が上田から松代へ移封され、松代藩真田家の初代藩主となると、既に形作られつつあった松代城下町に上田から真田家ゆかりの寺社を移して城下に組み込み、町を再編成していった。以来、真田家は明治の廃藩まで10代、約250年にわたり、松代藩主をつとめた。

真田家は代々学芸を好み、領民を感化した。そうした気風によって、幕末明治初期、時代をリードした佐久間象山や長谷川昭道ら多才な人物が松代から輩出された。

ウ 善光寺の再建と善光寺町の繁栄

川中島の合戦で、善光寺如来が持ち去られ、善光寺の門前町も衰退した。善光寺に、再び善光寺如来が戻されたのは、40余年後の慶長３年（1598）である。その後、江戸幕府開府に伴い、徳川家康より寺領千石の寄進を受け、次第に復興を遂げたが、善光寺の本堂が幾度か火災で焼失するなどの災難が重なった。しかし、そのような中で元禄５年（1692）に本格的な本堂再建計画が始まる。資金を調達すべく三都で出開帳を催し、工事に際しては本堂が類焼しないように門前町から北へ移すこととし、新敷地を造成したが、元禄13年（1700）に町家から類焼し、建築中の本堂も集積した用材とともに灰燼に帰した。これをうけて江戸幕府は再建を援助すべく、善光寺に全国を回る回国開帳を許可し、松代藩に造営奉行を用命した。５年に及ぶ出開帳は成功し、宝永４年（1707）に本堂が落成した。この出開帳は善光寺の信仰を全国に広めることにもなった。

回国開帳を契機に参詣者が増大すると、信濃へ入る道は全て善光寺道と呼ばれ、路傍には善光寺を指し示す道標が建てられた。善光寺の各院坊では信者を宿泊させ、世話をするとともに、全国各地に善光寺講が組織され、門前は全国から来る参詣客を迎えることで繁栄をみせた。

全国を巡る回国開帳はこれを契機として、延享４年（1747）～寛延元年（1748)、安永９年（1780）～天明２年（1782)、寛政６年（1794）～寛政10年（1798）の４回行われ、これらの出開帳で得られた資金を基に境内の整備が進められた。

エ 戸隠神社と戸隠信仰

嘉祥２（849）年に学門行者によって開山されたとされる顕光寺（現在の戸隠神社）は、本院、中院、宝光院からなる天台宗寺院で、江戸時代以前から多くの修験僧が修行に訪れる山岳信仰の聖地として栄えた。江戸時代に入ると戸隠の地主神とされていた九頭龍権現が農業神として庶民の信仰を集めたため、各院の宿坊では各地に代参講を組織し、参詣者を迎え善光寺と同様に信者を宿泊

させた。また戸隠の御師が各地にある得意先の代参講に出向いて戸隠信仰を広めていった。

明治時代に入ると廃仏毀釈によって天台宗の僧は還俗して神職となり、現在の奥社、中社、宝光社、九頭龍社、火之御子社の五社からなる神社組織に変わってゆく。

オ 善光寺地震

江戸時代末の弘化４年（1847）3月に北信濃を襲ったマグニチュード7.4と推定される地震は、甚大な被害をもたらした。このとき善光寺では御開帳が行われており、全国から多数の参詣客が集まっていた。参詣客も、地震によって倒壊する家屋の下敷きや各所で発生した火災に巻き込まれ、数千人の犠牲者が出たとされる。また地震により犀川にあった虚空蔵山が崩れて川を堰き止め巨大なダム湖を作った。このダム湖は地震発生から20日後に決壊し、川中島平一帯の人家を押し流す大洪水をひき起こした。洪水による犠牲者供養の石碑や洪水の痕跡を今も見ることができ、災害の規模の大きさを物語っている。

（５）明治時代～昭和20年

ア 長野の近代化

明治４年（1871）6月、中野県庁を善光寺町に移し「長野県」と改称する太政官布告が発せられ、7月、仮庁舎で執務を開始した。同月、廃藩置県によって松代藩は松代県となるが、11月、東北信６郡の7県すべてが長野県に編入された。その後明治９年（1876）には筑摩県を廃し中南信４郡を合併し、旧信濃国10郡すべてが長野県となった。善光寺が所在する長野村は、「県都」として市街の近代化が急速に進められた。明治７年（1874）に長野町となり、明治22年（1889）の町村制施行で周辺3町1村を合併し、明治30年（1897）には県下最初の市制を施行して長野市となった。

明治21年（1888）に鉄道が開通されるとそれまでの貨物輸送量が急速に増加し、商品流通が活発となり、商工業が発展し近代的市街地が形成された。大規模敷地を要する官庁や文教施設は市街地縁辺部に設置され、市街地との連絡道路が建設されることで、新しい町が生まれ市街地が拡大していった。大正12年（1923）には三輪村・芹田村・吉田町・古牧村を編入合併してさらに市域を広めた。

イ 製糸業の隆盛と衰退

江戸時代には商品作物として飼われていた蚕だが、近代に入り日本の生糸が海外で好評を博すと、国も富国策として繊維産業の発展に力を入れるようになったため、市域でも蚕を飼う養蚕農家が急増した。そのような社会状況の中、明治７年（1874）には旧松代藩士大里忠一郎ら数名が、松代町西条に国内初の

民間資本による器械製糸場を設立した（西条村製糸場、後に六工社と改称）。六工社には官営の富岡製糸場で工女として働き、蒸気器械製糸技術を学んだ和田（横田）英らの十数名も技術指導者として参画した。

昭和２年（1927)、ニューヨークのウォール街に端を発した世界恐慌の波は日本へも及び、昭和５年（1930）に主要輸出品だった生糸関連の価格が大暴落する昭和恐慌が始まった。ほとんどの農家が養蚕を行い、製糸工場で働いていた女工も多かった市域の影響は甚大であった。これに対し長野市では失業救済事業として、大峰山麓の展望道路、市営球場、市民プールの修理増設などを行うなどの対策を講じた。昭和７年（1932）に円相場が下落し円安となると、日本は輸出を急増させたため景気が急速に回復したが、製糸工場は景気回復の波に乗りおくれ、少しずつ衰退していった。

ウ 太平洋戦争下の長野

昭和 16 年（1941）の真珠湾攻撃に始まる太平洋戦争は、年を追うごとに日本側の劣勢となっていった。敗色が濃厚になる昭和 19 年（1944）になると天皇と直属の最高作戦指導機関の大本営を東京から長野へ移す計画が陸軍を中心に立てられ、同年 10 月に松代の象山、舞鶴山、皆神山に巨大な地下壕を設ける移転工事が始まった。翌年 8 月 15 日、日本の降伏によって戦争が終結したため、工事は中止されたが、本体の 8 割方は完成していた。工事の主要な労働力は勤労動員、学徒動員、朝鮮労働者らが担ったとされる。

昭和 20 年（1945）アメリカ軍による本土爆撃も各地で激しさを増した。長野市は終戦日 2 日前の 8 月 13 日の早朝午前 6 時 50 分頃から午後 3 時 50 分頃まで 6 回にわたって機銃掃射や爆撃された。この空襲では長野飛行場、国鉄長野駅機関区などの軍事・公共施設のほか長野飛行場の近くにあった大豆島国民学校も攻撃の対象となった。このときの空襲による死者は 47 人とされている。

（６）昭和 20 年～現在

ア 4 度の市町村合併

昭和 28 年（1953）の町村合併促進法により、翌 29 年（1954）に古里・長沼・柳原・朝陽・大豆島・安茂里・小田切・芋井・浅川・若槻の周辺 10 か村が長野市に編入合併した。昭和 37 年（1962）には広域都市の設置を目指して、長野市が近隣市町村に合併を呼びかけ、同 41 年（1966）に篠ノ井市・松代町・川中島町・若穂町・更北町・信更村・七二会村との大合併が成立した。平成に入って地方分権の推進や行政の効率化を目的として国が打ち出した「平成の大合併」により、平成 17 年（2005）に豊野町・戸隠村・鬼無里村・大岡村が、平成 22 年（2010）に信州新町・中条村が長野市に編入合併した。

イ 戦後の自然災害

昭和40年（1965）から松代で微小の地震が日に何度も起きる群発地震が発生、昭和44年（1969）に終息するまで地震総回数は64万8000回をかぞえた。昭和60年（1985）には地附山の南東斜面で大規模な地すべりが発生し、26人の犠牲者と多くの住宅被害を出した。台風による犀川や千曲川の氾濫、堤防決壊は戦後何度となく起こり、そのたびごとに農地や家屋が被害に遭った。特に令和元年（2019）には長沼地区や豊野地区を中心にかつて例を見ないほどの多くの被害が出た。住民の努力と多くのボランティアの尽力で、活力ある地域に復興した。なお、流失した歴史資料等は長野市立博物館の文化財レスキュー活動によって多くが復旧したが、現在も活動を継続して保護に努めている。

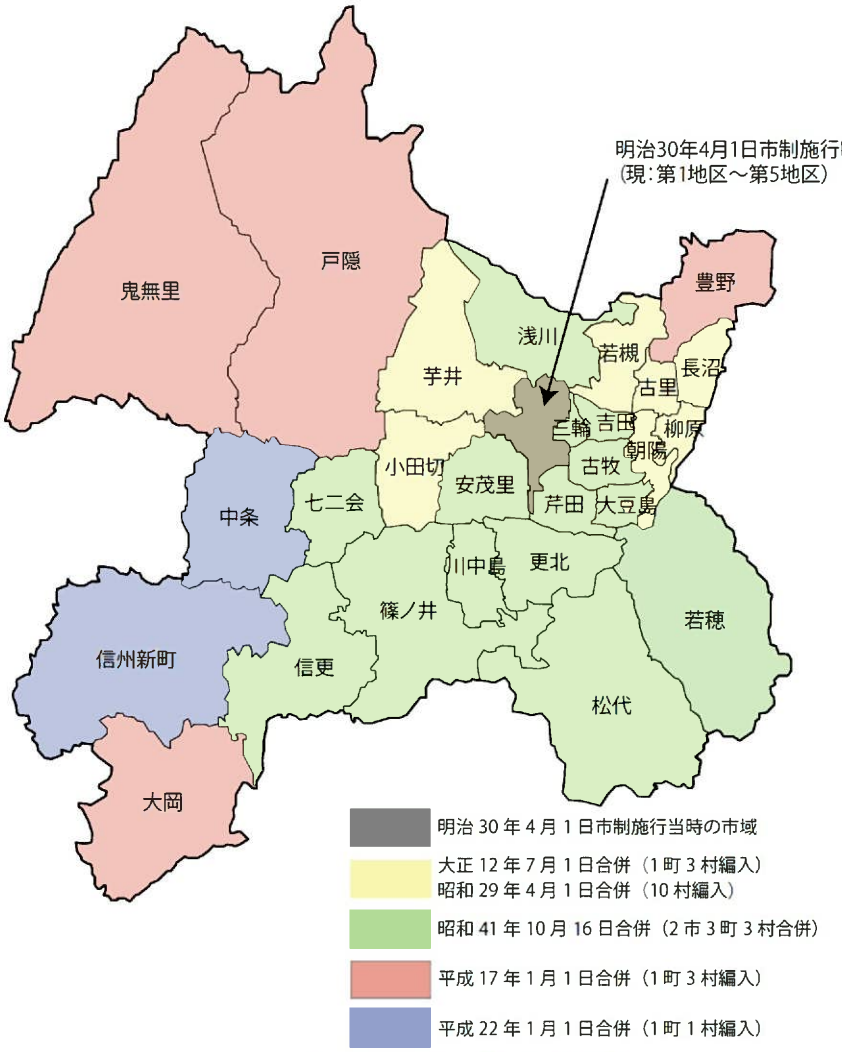
ウ 高速道路と長野新幹線の開通

昭和40年代からの自動車普及に伴い、全国各地で自動車道の建設が行われるようになった。長野では昭和48年（1973）に決定した岡谷市～長野市間の自動車道整備計画により、平成5年（1993）に長野自動車道・上信越自動車道が開通した。新幹線は北陸新幹線の基本計画がすでに昭和47年（1972）に決定されていたが、なかなか着工されなかった。しかし、平成3年（1991）に冬季オリンピックの同10年（1998）開催が決まったことが後押しとなり、平成9年（1997）に長野・東京間を最短1時間19分で結ぶ長野新幹線が開業した。

エ 冬季オリンピック・パラインピックの開催

平成10年（1998）に開催されたオリンピック冬季競技大会・パラリンピック冬季競技大会は、長野市を中心に５市町村（パラリンピックは４市町村）が会場となった。長野市ではオリンピック・パラリンピックの開催により競技施設が充実するとともに、各国から来る外国人との交流も盛んになった。特にこのときに始められた各国の選手と長野市内の小学校の生徒が交流する「一校一国」運動は、後のオリンピック開催国にも引き継がれる、長野冬季オリンピック・パラリンピック最大のレガシーとなっている。

このような国際的なイベント開催を経た長野市では現在、国際会議観光都市として、様々なコンベンションが誘致・開催されている。



現在の長野市域と市町村合併の経緯

第３章　長野市の歴史文化の特徴

１　歴史文化の特徴の整理の経緯

「歴史文化」とは、文化財とその周辺環境（文化財が置かれている自然環境や周囲の景観、文化財を支える人々の活動に加え、文化財を維持・継承するための技術、文化財に関する歴史資料や伝承等）とが一体となったものを意味する。また「歴史文化の特徴」とは長野市固有の歴史や文化にまつわる地域的な特色、長野らしさをかたち作る文化財とその周辺環境のことを指す。長野市の多様な文化財の価値や魅力を理解し、保存・活用を考えるうえで文化財を生んだ長野市の歴史文化の特徴を踏まえることは重要である。

長野市では歴史文化の特徴の抽出にあたって、事務局職員によるワーキンググループでキーワードを出し合い、これらを空間的視点（自然環境や地形）・地域社会的観点（出来事やテーマ）・歴史的観点（時代区分）から整理し、保存活用地域計画協議会でのワークショップを経て、歴史文化の特徴を地質学的視点、地政学的視点、信仰的視点、政治・経済的視点、民俗的視点から５つにまとめた。

２　長野市の歴史文化の特徴

歴史文化の特徴１　激動の大地がもたらす恵みと災い

長野市は北部フォッサマグナ地域に位置し、かつて海底だった場所である。その後の激しい地殻変動を受け、現在は長野盆地と東西の山地からなる。長野市の最高峰、高妻山（標高 2353m）も**海底だった場所**が隆起してできた山である。長野周辺の**地殻変動**は現在も続き、特に長野盆地を形成した西縁断層は変動量が 2000m を超え、善光寺地震の震源でもあり、活動度の高い活断層である。こうした断層の動きにより盆地が沈降し、千曲川や犀川等の河川が市内で合流し、扇状地や氾濫原、自然堤防や後背湿地など多様な自然環境を作った。一方で山地が隆起することで**地すべり**が起こり、それを利用して集落が形成されてきた。

こうした自然環境の多様性が素地となり、山地や盆地ではそれぞれの特性を生かした農耕や生活が営まれ、多様な生活文化を育成した。また、地下資源として日本初の商業油田や天然ガス･亜炭などのエネルギー源､石材としての火山岩類の利用、さらに、湧水や地下水、温泉なども**地質環境と深くかかわる恵み**でもある。

また、長野盆地の生い立ちは災害とも深くかかわっている。善光寺地震、松代群発地震、盆地西縁部や西山地区の地すべり、令和元年東日本台風による水害や被災地の石碑など、市内には我々とその祖先たちが災害と戦いながら生き抜いてきた痕跡が数多く残されている。

キーワードと主要トピックス

海底だった場所…シンシュウセミクジラ（信州新町）、セイウチ（中条・信州新町）ダイカイギュウ（戸隠・中条）、ホホジロザメ（戸隠）、シナノホタテ、ナガノホタテ、シガラミサルボウなどの貝化石（戸隠・鬼無里・中条・信州新町など）

地殻変動…活断層、長野盆地西縁断層、善光寺地震、盆地の沈降、山地の隆起

地すべり…茶臼山の地すべり、地附山の地すべり、地すべり地をいかした集落、芋井、鬼無里、七二会、中条などの棚田

地質環境と深く

かかわる恵み…浅川油田、石油井戸跡、善光寺参道敷石（郷路山産）、柴石（松代）、髻石（髻山）、松代など各地の温泉、長沼の米づくり、サケの遡上、松代の長芋、川中島白桃、鐘鋳堰などの用水群、裾花川の水力発電

セイウチ化石

郷路山の石切場

歴史文化の特徴２　人々が交わる地「長野」

長野市は長野県と新潟県との境界に当たる北信地域にあり、古くから内陸の山間地と日本海側をつなぐ交通の要衝だった。様々な人々が交わる市域では、時代の節目ごとに数々の**合戦**も繰り広げられてきた。特に戦国時代に甲斐国（山梨県）の武田信玄と越後国（新潟県）の上杉謙信が激突した**川中島の戦い**は、約 500 年が経過した現在でも人々のロマンを掻き立てている。

その後も、山地では連なる峰々や峠を越えて人や物が行き交い、千曲川と犀川が合流する盆地では江戸時代に**北国街道**が整備され、北信地域の大動脈となった。こうした様々な道によって他地域との交流が生まれ、経済が活発となり、多様な文化が集積される場となっていった。

近年では上信越自動車道や北陸新幹線も整備され、平成 10 年に開催された**冬季オリンピック・パラリンピック大会**では、世界中から多くの人々が市域を訪れることとなった。古来より多くの人々を迎え入れてきた長野市は、交流を軸として生み出されてきた多彩な歴史文化を現在に伝えている。

キーワードと主要トピックス

合戦…横田河原の戦い、中先代の乱、大塔合戦、山城

川中島の戦い…古戦場、関連史跡

北国街道…街道沿いの街並み（宿場町）、脇往還、谷街道、峰街道

冬季オリンピック・パラリンピック…オリンピック遺産

稲積の一里塚

横田城跡

歴史文化の特徴３　信仰が息づくまち「長野」

市域を代表する**善光寺**は、三国伝来の阿弥陀如来を絶対秘仏の本尊としている。仏教では救済の対象とされていなかった女性たちを積極的に受け入れるなど、社会の様々な人々と結縁する開かれた霊場として、多くの人々の信仰を集めていった。現在でも全国から参詣者が絶えず訪れ、門前町としての賑わいが続いている。ほかにも市域には、若穂地区の清水寺をはじめとする丘陵地や集落背後の山岳、山腹に立地する**里山の寺社**や戸隠神社に代表される**深山幽谷に位置する寺社**なども数多く残されている。

「長野」に暮らす人々の祈りは、**聖**と呼ばれる宗教者たちによっても支えられていた。江戸時代に災害や飢饉に苦しむ人々を救済するため、虫倉山を拠点に念仏を勧め、仏像を作ることで人々の平穏を祈った作仏聖たちの作品は今でも村々に伝えられている。

明治時代初期には、**神仏分離**令に伴う**廃仏毀釈**など大きな変化を迎えることとなったが、そうした苦難の時期を克服し、自然とともに育まれた「長野」の人々の祈りの歴史文化は、現在の暮らしの中に息づいている。

キーワードと主要トピックス

善光寺…善光寺信仰（本堂ほか建造物群、宿坊、講、持郡制、常夜灯、出開帳・居開帳、善光寺縁起、絵解き、正月行事）、

里山の社寺…中世荘園領主に関連した寺院（正覚院・清水寺・無常院・長谷寺など）、皆神信仰（和合院、本山派修験）

深山幽谷に位置する社寺…戸隠信仰（五社ほか建造物群、宿坊、構、古道、水神信仰、式年大祭、柱松神事、杉並木）、飯縄信仰（飯縄権現、石仏）

聖…勧進聖、作仏聖（山居、善光寺大幸）

神仏分離…戸隠神社、皆神神社

廃仏毀釈…寛慶寺仁王像、蓮華院仏像

善光寺本堂

正覚院の観音菩薩

善光寺大幸作の仏像

歴史文化の特徴４　政治経済の中心「長野」の誕生

古来より交通の要衝であった市域では、前方後円墳などの**ヤマト政権との結びつき**を示す文化財が存在し、この頃には政治的なまとまりが生まれていたことをうかがわせる。

盆地の中心部、善光寺の周辺には後町（後庁）という**官庁跡**を示す地名が残っている。古くから**門前町**として多くの人々が集まる地域であり、政治の拠点も置かれたのであろう。また、川中島の戦いを契機に築城された**海津城**（のちの松代城）は、信濃国で最大の石高を誇る大名の居城となり、**城下町**が発展した。一方で、山地では江戸時代に生活の道としての**往来**も数多く整備され、**鬼無里**などを拠点に人や物が集まり、盆地と信濃国西部の各地域との経済を結んでいた。

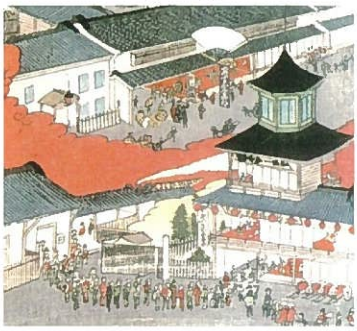
明治時代には長野県で最初の市制が施行され、県都「長野」として市内には様々な**近代インフラ**が整備されていった。中央通りには**洋風建築**の商家などが相次いで建てられ、現在につながる市街地としての景観が形成された。

私たちが暮らすまちの風景からは、「長野県長野市」の誕生へと至るまちづくりの歴史文化を見ることができる。

キーワードと主要トピックス

ヤマト政権との結びつき…川柳将軍塚古墳、出土遺物など
官庁跡…地名、出土遺物など
門前町…宿坊群、町屋、弥栄神社、善光寺三鎮守など
海津城…松代城、新御殿など
城下町…武家屋敷、泉水路など
往来…松代往来、戸隠往来、安曇往来、高府往来、早川道など
鬼無里…鬼無里神社ほか祭礼・屋台（山車）、町屋など
近代インフラ…鉄道・道路整備、電気・ガス・水道整備など
洋風建築…藤屋旅館・中澤時計本店など参道沿いの建物

円筒古墳
（川柳将軍塚古墳出土）


開業当時の長野停車場

鬼無里の屋台

松代城跡

旧長野県庁舎

歴史文化の特徴５　「長野」に生きる人々の暮らしと文化

長野市域では、**山地・盆地**で多様な生活文化が育まれ、地域間の**交流**がなされてきた。山地・盆地の生産生業・商品流通を背景として特徴的な**食文化**が発展し、かつては山地で生産される作物が盆地の町場の生活を支えていた。おやきに代表される粉食は今も親しまれている。また、**千曲川水系**の河川が流れ込む地形上にあるため、かつては河川や用水を利用した漁撈が行われ、通船が行き交い、川とともに生活が営まれてきた。

市内各地では多様な**年中行事・祭礼・芸能**が行われている。道祖神の祭、獅子舞、御柱祭などが残り、神社や地域の祭事にあわせて花火の打ち上げを見ることができる。善光寺門前をはじめとするかつての町場には祭礼で巡行する屋台が残り、祭礼に出る姿が見られる。

キーワードと主要トピックス

山地…麻生産、麦作、養蚕、風穴、山中紙
盆地…木綿、養蚕、製糸、二毛作、堰
交流…西山と門前をつなぐ道
食文化…おやき、せんべい、おぶっこ、えご
千曲川水系…つけば、漁撈、通船、荷上場、用水、地割慣行
年中行事・祭礼・芸能…道祖神祭、獅子舞、花火、御柱祭、祇園祭と屋台、地蔵盆

犀川神社の太神楽

篠ノ井越の人形道祖神

ながの祇園祭

松代の御柱祭

麻煮の釜屋